第15回花の国づくり共励会(平成17年度)花き技術・経営コンクール審査講評

平成１８年３月１７日(金)
審査委員長　今西　英雄

第１５回花の国づくり共励会花き技術・経営コンクールには、花の国づくり都道府県協議会より８件の推薦がありました。審査は、５名の審査委員により、提出された書類に基づく第１次審査と現地での第２次審査を通して厳正に行われ、別表の通り受賞者名簿が作成されました。

本共励会の最高賞である農林水産大臣賞には、次の経営体が選ばれました。

埼玉県児玉郡児玉町（現本庄市児玉町）の田島　嶽氏は、昭和45年に260m$^2$のハウスを建設し、シクラメン、プリムラ、アジサイの施設鉢物栽培から営農を開始した。その後、シクラメン栽培を中心に規模拡大を続けると共に、昭和57年には山上げ栽培地として長野県軽井沢町に借地を得てパイプハウス４棟を建設し、シャコバサボテンとシクラメンの山上げ栽培を始めた。平成８年にはミニシクラメンを導入し、戸外で高級感のあるガーデニングの材料として利用することを思い付き、販売業者などと連携して「ガーデン用シクラメン」を初めて２万鉢出荷した。これをきっかけに「ガーデンシクラメン」のブームが起こり、平成 10 年には山上げ施設を軽井沢町、御代田町で拡大して本格的に栽培に取り組むようになり、今日約１ ha の施設栽培規模で 25 万鉢出荷という氏の経営を支える柱となっている。長年の栽培経験を活かして露地植えに適した品種を選択し、独自に配合した土を使った鉢栽培で、夏期は標高 850 ～ 930 mの施設に運び上げ、冷涼な気候の下で早く開花させて９月中旬以降の出荷を可能にし、品質の優れた品を秋の需要期に供給する技術は高く評価される。同時に、花き業界としては初めてともいえる種苗業者、市場、販売店との連携による「ガーデンシクラメン」の商品化と普及拡大に貢献した点も大きな功績である。その後も、３色混合咲きの「メリメロ」と呼ぶミニシクラメンや、家庭で安心して飾れるクリーンなミニシクラメンの商品化、リースのように寄せ植えした花壇苗や長い鉢に植えたゼラニウムなど、時代や消費者の要求を先取りした商品を提案し続けている。シクラメンの栽培に施設や労力を多く必要としない冬期間には、ゼラニウムやミニペラルゴニウム、ミニガーベラなどの鉢物生産を組み合わせて取り入れ、効率的な鉢物生産を行っている。これらの生産物も一部は受託生産方式で、その他もすべて予約販売となり、栽培開始前から販売先と販売価格が決まっているという安定した経営状況である。これらの結果としての極めて高い収益性が高く評価され、農林水産大臣賞に値すると判定された。

農林水産省生産局長賞に選ばれた３経営体は以下に述べる点で高く評価されますが、農林水産大臣賞に選ばれた１経営体に規模や収益性の上で及ばないと判断されました。

愛知県幡豆郡一色町の内藤完次氏は 59a 強の温室でバラのロックウール養液栽培に取り組み、34 品種の栽培で多様なニーズに対応する一方、差別化のために巨大輪品種の導入や一輪用品種のスプレー仕立て化など付加価値の高い高品質の切花生産に努め、いち早くバケット流通にも取り組んでおり、市場出荷以外に切花や妻のとき子氏による花束・ブーケなどの加工品の直売、ホームページ販売にも取り組む積極的な経営の展開を図っている点が評価される。

群馬県前橋市の小倉文雄氏は、施設 95a、露地 30a の面積でシクラメンと花壇苗その他の鉢物を栽培し、シクラメンのプラスチック鉢生産やセル成型苗生産が可能であることを先駆けて実証し普及に貢献したこと、シクラメンやルピナスの優れた系統の自家採種、播種機や土詰め機の導入による労力と作業時間の軽減、標高 350m という立地条件を生かした秋出荷の花壇苗生産技術の確立など、堅実な経営が評価される。

長崎県ＪＡ壱岐市花き部会は集団の部で応募され、ヒマワリ、ナデシコ、小ギク、ナノハナを柱に、離島のハンディをこえて女性や高齢者主体で栽培技術の研鑽に励み、専任の検査員を雇用して選別の徹底を図り高品質化に努め、１億円を超える販売額をあげ活発な花き生産を展開していることは、地域振興という点で高く評価される。しかし、本コンクールの技術・経営を主体に審査する基準からみるとこれ以上の評価には値しないと判断された。

以上のほか、沖縄県から応募のあった大ギク生産の玉城昌伸・蔵下良彦両氏、岐阜県から応募のあったスパティフィラム専作の高木兼雄氏も、高い技術に基づき安定した経営を行っている点が高く評価され、（財）日本花普及センター会長賞に選ばれました。

また、昨年に続き今年の審査でも印象に残ったのは、単に生産するだけでなく販売面にも力を注ぎ、消費者ニーズに合う品目の生産や商品の開発に努めておられる経営体が多い点であり、「花が売れない」といわれる中で、心強く感じました。

受賞者の皆様には心からお祝いを申し上げますとともに、今後ともわが国の花き産業の発展のためご尽力下さるようにお願いし、審査講評といたします。

# 農林水産大臣賞受賞　田　島　嶽　氏

田島夫妻と三男俊明氏（生産温室）

ガーデニング用ミニシクラメン栽培状況

本庄市の栽培温室群

ゼラニウムの生産状況

ミニペラルゴニウムのバッケト寄せ鉢 オリジナル商品化

リースのような寄せ植の商品化

## 第１５回花の国づくり共励会
## 花き技術・経営コンクール受賞者一覧表

【農林水産大臣賞】

◎　田島　　嶽　55歳　（施設：ｶﾞｰﾃﾞﾝｼｸﾗﾒﾝ、ｾﾞﾗﾆｭｰﾑ、ﾐﾆﾍﾟﾗﾙｺﾞﾆｭｰﾑ、ﾐﾆｶﾞｰﾍﾞﾗ、花付き苗ﾍﾟﾁｭﾆｱ、花付き苗ﾊﾞｰﾍﾞﾅ、ﾍﾞﾛﾆｶ、ｼｸﾗﾒﾝ苗、その他苗生産）
〒367-0207　埼玉県本庄市児玉町下真下１１４

【農林水産省生産局長賞】

◎　小倉　文雄　54歳　（露地：花壇苗、施設：ｼｸﾗﾒﾝ、花壇苗、その他鉢物）
〒371-0244　群馬県前橋市

◎　内藤　完次　54歳　（施設：ばら）
〒444-0404　愛知県幡豆郡

◎　ＪＡ壱岐市花き部会
代表者　下條　利一　70歳　（露地：小菊、菜の花、施設：ひまわり、なでしこ）
〒811-5193　長崎県壱岐市

【(財) 日本花普及センター会長賞】

◎　高木　兼雄　61歳　（施設：ｽﾊﾟﾃｨﾋｨﾗﾑ3.5号、ｽﾊﾟﾃｨﾋｨﾗﾑ6号）
〒501-0103　岐阜県岐阜市

◎　玉城　昌伸　40歳　（露地：大ｷﾞｸ、施設：大ｷﾞｸ、小ｷﾞｸ、ｽﾌﾟﾚｰ菊、洋ﾗﾝ）
〒905-0226　沖縄県国頭郡

◎　蔵下　良彦　48歳　（露地：大ｷﾞｸ、施設：大ｷﾞｸ）
〒905-0502　沖縄県国頭郡

【農林水産大臣賞受賞理由】

田島　　嶽　　埼玉県本庄市児玉町下真下１１４

田島　嶽氏は、昭和 45 年に 260m$^2$ のハウスを建設し、シクラメン、プリムラ、アジサイの施設鉢物栽培から営農を開始した。その後、シクラメン栽培を中心に規模拡大を続けるとともに、昭和 57 年には、山上げ栽培地として長野県軽井沢町に借地を得てパイプハウス４棟を建設し、シャコバサボテンとシクラメンの山上げ栽培を始めた。平成８年には、ミニシクラメンを導入し、戸外で高級感のあるガーデニングの材料として利用することを思い付き、販売業者などと連携して「ガーデン用シクラメン」を初めて２万鉢出荷した。これをきっかけに「ガーデンシクラメン」のブームが起こり、平成 10 年には、山上げ施設を軽井沢町、御代田町で拡大して本格的に栽培に取り組むようになり、今日、約１ ha の施設栽培規模で 25 万鉢出荷という氏の経営を支える柱となっている。長年の栽培経験を活かして露地植えに適した品種を選択し、独自に配合した土を使った鉢栽培で、夏期は、標高 850 ～ 930 mの施設に運び上げ、冷涼な気候の下で早く開花させて９月中旬以降の出荷を可能にし、品質の優れた品を秋の需要期に供給する技術は高く評価される。同時に、花き業界としては、初めてともいえる種苗業者、市場、販売店との連携による「ガーデンシクラメン」の商品化と普及拡大に貢献した点も大きな功績である。その後も、３色混合咲きの「メリメロ」と呼ぶミニシクラメンや、家庭で安心して飾れるクリーンなミニシクラメンの商品化、リースのように寄せ植えした花壇苗や長い鉢に植えたゼラニウムなど、時代や消費者の要求を先取りした商品を提案し続けている。シクラメンの栽培に施設や労力を多く必要としない冬期間には、ゼラニウムやミニペラルゴニウム、ミニガーベラなどの鉢物生産を組み合わせて取り入れ、効率的な鉢物生産を行っている。これらの生産物も一部は受託生産方式で、その他もすべて予約販売となり、栽培開始前から販売先と販売価格が決まっているという安定した経営状況である。これらの結果としての極めて高い収益性が高く評価された。

【農林水産省生産局長賞受賞理由】

小倉　文雄　　群馬県前橋市鼻毛石町２１６６－１

小倉文雄氏は、施設 95a、露地 30a の面積で、シクラメンと花壇苗、その他の鉢物を栽培し、シクラメンのプラスチック鉢生産、セル成型苗（プラグ苗）生産が可能であることを実証し、他の農家への普及に大きく貢献したこと、シクラメンやルピナスの優れた系統の品種を交配・選抜することで、市場評価の高いシクラメン、ルピナスを生産している。

標高 350m 程度の立地条件と栽培技術を組み合わせ、平坦地で良品を生産することが困難なゼラニューム等の秋出し花壇苗の良品生産も行っている。

鉢・ポットへの用土詰め作業を従来の手詰めから大型の土詰め機を導入するなど大幅な作業時間の短縮、労力軽減を図って、生産と品質向上につなげている。

また、雇用を増やすことで、自身と家族の負担軽減を実現させている。

氏は、現在、群馬県農業経営士、群馬県花壇苗協議会長として周辺地域のみならず群馬県全体の花き栽培技術の向上や生産拡大、農業経営者育成に大きく貢献していることが評価された。

内藤　完次　　愛知県幡豆郡一色町大字野田字上野田１１３

内藤完次氏は、59a の温室でバラのロックウール養液栽培に取り組み、34 品種を栽培し、多様なニーズに対応する一方、差別化のために巨大輪品種の導入や一輪用品種のスプレー仕立化など付加価値の高い高品質の切花生産に努めている。更に、バラのロックウール栽培で近年問題となっている高温性で土壌伝染性の強いピシュウム菌や、リゾクトニア菌による立枯症に対して、通常ロックウール栽培では営利用品種の自根栽培であるが、内藤氏は、あえてノイバラ台木の接木苗を利用した耕種的防除を実施し、６月から９月までの高温期のピシュウム菌による根腐病の回避を図っている。

また、いち早くリターナブルバケットを用いた出荷にも取り組んでいる。

市場出荷以外では、妻のとき子氏が、アレンジ、花束・ブーケなどの加工を担当し、より付加価値のある商品を手がけており、ホームページを開設し、ＰＲ活動に積極的に取り組んでいる。

規模拡大に伴い家族労働だけでは栽培管理作業をやりきれない面があり、雇用労力に頼るところが多い。内藤氏は、こうした状況下では、経営者と同等の能力を雇用者がもてるように努めており、意識の統一や技術力の向上を図っている点等も評価された。

ＪＡ壱岐市花き部会　　長崎県壱岐市郷の浦町東触５６０
代表者　下條　利一

ＪＡ壱岐市花き部会は、集団の部で応募し、ヒマワリ、ナデシコ、小ギク、ナノハナを柱に、離島のハンディをこえて女性や高齢者主体で栽培技術の研鑽に励む一方、新規に取り組みやすいように、栽培が容易で、経費もかからず、市場価格が安定している品目を選定している。

栽培面では、通気、日当たりがよいように２条植にしてボリュームを確保し、マルチ栽培により島特有の湿気の多い環境下での病気の予防、水分ストレスの回避を図っている。

また、夏秋出荷では、年々出荷の前進化が問題となっていたが、平成１６年より電灯照明による開花調節を試行し、平成１７年度からは、本格的な露地電照栽培により出荷調整を行い、市場の需要に応えている。

労働軽減については、ヒマワリでは、シーダーテープ利用により、播種作業の効率化、発芽の均一化を図っている。環境保全については、マルチ栽培、防虫ネットの設置により農薬の節減も図っている。

専任の検査員を雇用して選別の徹底と高品質化に努め、１億円を超える販売額を上げ活発な花き生産を展開していることは、地域振興という点で評価された。

【(財) 日本花普及センター会長賞受賞理由】

高木　兼雄　　岐阜県岐阜市一日市場１丁目２５－１

高木兼雄氏は、栽培面積73aの温室で、スパティフィラムの鉢物を栽培している。安定した周年出荷を行うためには、品質の安定した苗の導入が不可欠である。このため、海外の種苗会社によるメリクロン苗が高品質であったため、平成１４年から段階的に導入を開始し、現在は、100%海外からの輸入苗を使用している。これにより、品質の安定とともに、当初に使用していた国内産メリクロン苗と比べて約３分の１のコストダウンが図られている。

自社のブランド力を高めるため、新品種の開発にも意欲的に取り組んでおり、現在、‘スーパー・ミニメリー’の名で出荷しているスパティフィラムは、枝変わりの中から選抜したオリジナル品種である。

スパティフィラムは、30℃以上の高温下では、花芽の分化と停滞がみられるので、夏期の温室内の環境調節には、特段の注意が払われている。秋出荷用の

栽培では、品質低下を招かないように遮光度の高いカーテンの使用により照度を下げるとともに、昼夜を問わず間欠式ミスト を行い空中湿度を高める等の工夫が見られるほか、リフトカートの導入、全自動ポッティングマシンの導入等により作業の効率性を高めていることなどが評価された。

### 玉城　昌伸　　沖縄県国頭郡本部町健堅１８９

玉城昌伸氏は、露地で大ギク 36a、施設で大ギク 26a、小ギク 23a を栽培している。花き栽培での農薬の多量使用は、経費面や健康面において大きな負担となっており、その負担軽減を図ろうとの観点から黄色電球の持っている低誘虫性を利用したランプ開発を行い、農薬使用量の低減を図っている。

電球直下は、高照度のため、キク栽培での使用では、花芽分化を阻害するので、この問題点を改良し、キク栽培でも使えるように工夫している。このため、ヨトウムシ類などの被害が軽減でき、農薬散布回数も減らしている。また、全自動選花機を導入し、選別出荷作業の効率化も図っている。

玉城氏は、地域農業青年クラブに加入し、組織活動をとおし地域の小中学校などへ町の花であるデンファレの無償提供を行うほか、地域花き部会に加入し、積極的に部会活動に取り組むなど、自己研鑽に努め、課題解決を図っていることなどの点が評価された。

### 蔵下　良彦　　沖縄県国頭郡伊江村東江前１５６７

蔵下良彦氏は、昭和５９年に沖縄県国頭郡伊江村で兄と共同で花き生産を開始し、昭和６３年に独立し、現在まで２１年間大ギク栽培を行っている。

現在は、収益性の高い露地大ギクを中心とし、実面積115a、延べ面積175aの経営を行っている。

台風対策として防風・防虫ネットの平張ハウス導入の先駆けで、それまで沖縄県の年末出荷は台風により計画が50％も狂ったが、平張ハウス普及面積は、46haに増大するなど、施設での栽培試験など蔵下氏が率先して果たした効果は大きい。

環境保全の面では、自家製堆肥と米ぬか、ぼかし肥等有機質を中心とした環境にやさしい土づくりを行っている。また、減農薬を目途とし、平張施設を導入し、防虫ネットによる害虫の侵入を防ぎ、農薬散布回数の軽減を行うほか、農薬に代わる資材の試験（糖蜜ニーム剤等）も積極的に行っている。

蔵下氏の花き栽培への取組は、地域に大きな影響を与えるとともに、次代の担い手の良いお手本となっていること等が評価された。